

水無月を迎えて

分所長 高木敏彦

今年も入梅の時期となりました。体調管理の難しい頃ですので、くれぐれもご自愛いただけますようお願い申し上げます。

先月の私の母の葬儀に際しましては分所の皆様よりご生花を賜りまことにありがとうございました。お花の大好きだった母への何よりも供養となりました。お陰様で口丹波本苑の皆様の心のこもった式典を終えることができました。

今月号は母の思い出を記させて頂きますことをお許し下さい。

母の思い出

高木 敏彦

母は昭和5年の4月に香川県の仏生山で生を受けた。7人兄妹のうち2番目で幼いころは大阪で育った。戦時中に故郷に疎開し終戦後は高松で就職し父と一緒に住んだ。結婚する前にトラックに轢かれるという大怪我をし子供を生む事は難しいと医者には言われたらしいが、兄と僕の二人を授かった。当時警察勤めの父は給料が安く母は色々な内職とか仕事をして家計を助けていた。中でも華道と茶道は教授の免状をとるまでになった。

僕が小学校2年生の時に大本入信を家族揃ってした。入信後、母は特に三代様の下に通い

お茶事の手伝いなどをして可愛がつて貰った。そのうちにお茶は石州流から裏千家に転向して教授にまでなった。

兄は高松高専を3年で中退して大学に行くと呼し京都へ出て行った。学生紛争の激しい時期でありまともに勉強もせずに学生運動の中に入っていた。心配をした母が亀岡の信者さん宅に下宿させてもらい食事は大本の食堂で食べれるように計らってもらった。大学受験に失敗した兄がどういうわけか梅松塾に入ることになったが、塾の再募集をしてもらい入塾できたのは、それは母が三代様に相談をしたからできたことであつた。

僕も大学を卒業前に就職活動中にある会社の最終面接まで進んだが叶わなかった。名古屋支店の担当者が実は最終面接に行く前からもう一人の人が入社することが決まっていたと僕に喋った。親が関係会社の重役であるからと。そのことを母に喋ると母は激怒をして「コネを使うなら私にもある」と石州流の重鎮で三井系のある人に相談をしたことがある。その人から丁寧な手紙が母にあり力及ばず申し訳ないと謝りの手紙であつた。

高松分苑の青年部時代は同期の高校生数人を中心にして母の指導でお茶の練習を励んだ。夏の青年祭には野点茶席を天恩郷の松林の下で催し三代様にもご入席頂いたのが懐かしい。当時男の子がお茶を点てるのは珍しかった。利休の精神を母から教わった。

7年前には心筋梗塞を発症した僕を亀岡から碧南消防署に連絡をして救急車を手配してくれた。後、30分遅かったら命が無かつたと

医者から言われた。

唯一無二の母が九五歳で天界に旅立った。長い間「苦勞様！そしてありがとう！！」

『大難は小難にと祈らずにいらぬ心、人類の不幸を悲しまずにおれぬ心、これが本当の信仰者の心であり、うつくしい心であるとおもいます。』

出口 直日 《私の手帖》

主な行事予定

- 6月 8日(日) 午後1時半より
碧南分所月次祭 担当 第3班
6月15日(日) 午前10時より
三河本苑月次祭
7月13日(日) 午後1時半より
碧南分所月次祭 担当 第1班
7月20日(日) 午前10時より
三河本苑月次祭
7月27日(日)
万祥殿献勞奉仕

6月の誕生者

おめでとぅーございます！

小笠原 繁 藤浦 佳仁 1日 生田 亮紀 3日 奥谷 克弥 8日 久野 美恵子 11日 村松 凖恵 16日 片岡 健 奥谷 中庸 18日 三浦 鳳介 27日